

M-GTA 研究会 News letter no.28

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、林葉子、福島哲夫、

水戸美津子、山崎浩司

<目次>

◇近況報告：私の研究

◇連載・コラム：『死のアウェアネス理論』を読む（第4回：番外編）山崎浩司

◇第45回研究会のご案内

◇編集後記

◇ 近況報告：私の研究

長山 豊（金沢大学附属病院）

昨年、私は MGTA 研究会にて、修士論文の分析途中であったデータを2度にわたって発表させていただき、大変感謝しております。今年の3月に博士前期課程を修了することができました。研究テーマは、「精神科急性期病棟における隔離・身体拘束の看護介入プロセス」です。研究会では、様々な専門分野の方々から頂いたアドバイスは非常に多角的で示唆に富んでおり、何よりも、私自身が研究手法自体における基本的な部分を理解していない事に気づかされました。データの中からどのような興味深いプロセス・うごきが読み取れ、データを実際にどのように解釈しながら概念化し関連性をみていくのかと、研究手法の最も大切な基礎的な部分を、自分のデータを通して学ばせて頂ける最高の機会であったと思います。

また、データに対する自分の見解について、精神科急性期場面で判断できずに葛藤している看護師像が根強いと述べたところ、スーパーバイザーの先生から「後ろ向きだね」とコメントの後に、看護師は隔離・身体拘束の判断が求められる状況で、能動的に多様な戦術を駆使して動いており、このような状況下での専門的な看護技術の確立を目指すことが研究意義にあたるのではないかと示唆を頂きました。偏った方向からデータをみてしまう、自分の分析のクセ・傾向を客観的に見つめなおす転機になりました。臨床においても、ついつい負の部分にばかりに意識が向き、自分達ができていることと、できていないことを客観的に評価していないことが大いにあると思います。研究会の参加を経た後、病棟での日常業務や様々な出来事に対しても「こういう考え方・方法もできるのではないか」と改めて新鮮な感覚を抱きながら勤務できているように感じるのは、MGTA の分析技法に触れ、様々な方々からの多角的なアドバイスに支えられて修士課程を乗り切れた経験が影響していると思います。

今後は、修士論文の内容を6月の日本精神保健看護学会で発表する予定であり、長谷川先生とともに論文投稿に向けて進めております。修士を終えて、これからが本当のスタートだと捉えて、まず自分の病棟に研究成果を還元していけるよう努めていく所存です。今後もよろしくお願いいたします。

.....

國重 智宏(上智大学大学院博士前期過程総合人間科学研究科社会福祉学専攻)

ソーシャルワークにおいて、クライアント-ワーカー関係は「基底」であり、「本質」であり、「魂」であると言われています。特に日本の精神科ソーシャルワークでは、精神科ソーシャルワーカー(以下、PSW)による人権侵害とされている Y 問題以降、「ここで、今の」かかわりの重要性が繰り返し唱えられています。

しかし近年、十分とはいえないまでも社会サービスは増え、国家資格(精神保健福祉士)も誕生する中で、先達の PSW が大事にしてきた「かかわり」が軽視され、サービスや援助技術にクライアントを当てはめるような PSW が増えてきているように思えます。私自身、精神科病院の PSW 時代、クライアントを援助技術や社会資源に当てはめることがソーシャルワークだと勘違いしていました。しかしスーパーヴィジョンを通じ、クライアントと話し合い、想いを感じ、彼らと共に課題に向かうことの重要性を知ることができ、改めて「かかわり」の重要性に気付き、本研究を始めました。

しかし研究を始めてみると、経験知である「かかわり」は用語の定義すらされておらず移行性や確証性が高い研究は少ないことが分かりました。そのため経験知を再編成するのに有効な M-GTA を用いて理論化し、先達が培ってきた経験知を次世代の PSW に理解しやすい形で伝え、その価値や技術を広く伝播していければと考えました。

現在、インタビューは終了し、分析作業の段階です。当初は「かかわり形成のプロセス」を分析テーマで考えていましたが、坂本先生(大正大学)の助言などを参考に分析テーマの再設定を行いました。データを繰り返し読み返してみると、PSW が関係形成されたと感じたのは援助目標が達成された時ではなく、クライアントが本音をこぼした時でした。このことから分析テーマは「クライアント-ワーカー関係における本音の関係形成プロセス」としています。

バイト(退院促進支援のコーディネーターや広域支援員)に精を出し過ぎて修士 4 年目に入ってしまいましたが、今年こそ書き上げます。みなさんご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

.....

森 美保子(専修大学 非常勤講師)

私はこれまで青年や高齢者を対象にした研究をしてきました。博士論文では「書記的方法と対面対話方式の比較による対話的自己の構成に関する研究」というテーマで、書記的方法、対面対話方式、その組み合わせによる方法を比較・検討し、各方法のカウンセリング効果や限界、適用対象などについてまとめました。そして、本年 3 月に学位(心理学博士)をいただくことができました。その論文の中に、書記的方法とグループでのシェアリングで構成された手引きによる自伝法(guided autobiography)に関する研究があるのですが、対象者の方々の内的変化の過程をぜひ質的研究、それも M-GTA を用いて分析したいと思い、M-GTA の研究会に参加させていただきました。質的研究法の中でも M-GTA を選んだのは、現象のプロセスや社会的相互作用を明らかにすることに適しており、対象者にとっての意味

についても考察できると考えたからです。また、それらのことは事前に行っていた量的研究では解明できないところでもありました。研究会ではメンバーの皆様のエキサイティングな研究活動から刺激を受け、すでにM-GTAを用いた研究論文を発表しておられる先輩の皆様からも貴重なご示唆をいただきました。木下先生のご著書すべてを何度も読み直し、研究をはじめた当初は、それでなんとなく理解したつもりになっていましたが、実際には予想したほど容易でなく、分析をすすめていくなかでゆきづまりを感じて、木下先生にスーパーバイズをお願いいたしました。その結果、自分の中で分析テーマや分析焦点者の絞込みなど、初歩的なところすら曖昧であったことが明確になり、再度分析しなおして論文を執筆し、「カウンセリング研究」(Vol.38 no.3 2005)に掲載されました。その研究によって現場で経験的に感じていたことの再構成が可能になり、手引きによる自伝法を実施する際の今後に向けての指針が得られたと思っています。

現在は東日本 M-GTA 研究会(水戸先生)にも参加させていただいており、休学もしくは長期不登校からの復学者が大学生活に適応していくプロセスについて研究したいと構想しています。これからもメンバーの皆様とともに、研究の交流をさせていただき、さらに理解を深めていくことができればと願っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

坂本 智代枝(大正大学 社会福祉学専攻)

私が M-GTA に関心を持ったのは、「複雑でうごきのある現象を説明する」というところです。しかし、それはたいへん難しく、「研究する人間」としての私自身が問われる作業でもあります。質的研究にとつて、研究テーマと問題意識を明確にするプロセスが重要であることが強調されています(波平 2005)。それは、M-GTA で取り上げられている「研究する人間」においても強調されており、研究する者が何を目的に、なぜその研究を行うのかという研究の意味を問うプロセスを重視しています。「研究する人間」の問題意識やリサーチクエスチョンが重要であり、研究者と研究協力者、分析焦点者と研究者、研究結果を応用する者と研究者の人間的な相互関係性において、データの解釈を行う主体として「研究する人間」を位置づけるということです。その中でも、最近たいへん重要に考えるのが、「研究結果を応用する者と研究者の人間的な相互関係性」ということです。研究で得た知見を応用して役に立つようにするために常に実践との対話が必要であると考えております。

最初に取り組んだ研究テーマは、長期入院を体験した精神障害者にとって当事者同士の支え合いが、地域生活継続にどのような影響を及ぼしているのかということを取り上げました。しかし、単純な内容分析になったり、分析テーマの絞込みの設定がうまくいかなかったり等取り組めば取り組むだけ新しい発見はあるものの、本当に奥の深い難しい作業であることを実感する日々でした。それは今でもそうです。

現在は、その関心テーマの延長として、「精神障害者のピアサポーターを支援するソーシャルワーカー」に焦点をあてて取り組んでいます。継続的比較分析の作業を行っているものの、データから「うごき」を読み取るのは難しい作業で、「データに密着すること」とはどういう意味なのかを改めて考える今日この頃です。

研究会に参加させていただき、いつも感謝していることは発表させていただくことはもちろんのこと、

多くの会員の研究発表により、自分自身の研究でつまづいているところや、腑に落ちていなかったところを実践的に理解する機会を得ることができることです。私自身未熟ながら世話人をさせていただいておりますが、研究会の会員の方々とともに研究に努力を積み重ねて参りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【引用文献】波平恵美子(2005)『質的研究 Step by Step』医学書院。

◇連載・コラム

『死のアウェアネス理論』を読む（第4回：番外編）

ひろし
山崎浩司（東京大学）

1. はじめに

今回は、前回予告したとおり、『死のアウェアネス理論』の共著者にして GTA の共同考案者である、アンセルム・L・ストラウス(1916～1996)について論じてみたい。『死のアウェアネス理論』の内容に沿って読むわけではないので、今回の議論は「番外編」ととらえていただきたい。

ストラウスはグレイザーよりもよく知られているが、それは彼が社会学者あるいは社会心理学者として、GTAにとどまらない活躍をしてきたからであろう。彼は、いわゆるシカゴ社会学の第4世代¹とみなされ、1950年代以降、第2次シカゴ学派²を盛り上げていく動きのまっただなかにいた人物である。

和訳されているストラウスの業績には、『死のアウェアネス理論と看護』（グレイザー・ストラウス, 1988）以外に、コービンらと書いた医療社会学的著作『慢性疾患を生きる』（ストラウス他, 1987）、GTA研究者には馴染み深い『データ対話型理論の発見』（グレイザー・ストラウス, 1996）、そしてアイデンティティの問題を扱った『鏡と仮面』（ストラウス, 2001）などがある。

以下では、まずストラウスの経歴を簡単にふりかえる。そして、彼の社会心理学への関心、医療社会学的な知見、方法論的貢献について概観してみたい。

2. 経歴

ストラウスは、はじめヴァージニア大学で生物学を専攻したが、その後シカゴ大学の大学院に進学し、シンボリック相互作用論を唱導したハーバート・ブルーマーの指導の下、1942年に『態度概念の批判的分析』で修士号を修めた。引き続いて博士課程では、第2世代シカゴ社会学者のアーネスト・バージェスに師事し、『大学都市住人の友人選択を左右する3つの心理的要因に関する研究』で1945年に博士号を取得した。

職歴としては、1944年から1958年にかけて、ローレンス・カレッジ、インディアナ大学、シカゴ大学で社会学の教鞭をとり、ドイツのフランクフルト大学でも1年間教えていた。その後1960年までは、シカゴ市のマイケル・リース病院心身・精神医学研究所で研究を主導したが、同年にカリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部が社会・行動科学科を新設するに際して、初代学科長として招聘されたために

移籍した。そこで1987年の定年退官まで教授職を務め、その後も1996年に逝去するまで名誉教授の職にあった³。

3. 社会心理学への関心

ストラウスのキャリアのうち、社会心理学的な研究がもっとも盛んだったのが、1960年までの時期である。著作でいうと、『社会心理学 (*Social Psychology*)』(1949年)、『ジョージ・ハーバート・ミードの社会心理学 (*Social Psychology of George Herbert Mead*)』(1956年)、そして『鏡と仮面』(1959年)が出版されている。もちろん、その後も1960年代に、たとえばミードの社会心理学の第2版や、社会心理学の読本などが発表されているが、これらの基盤は1960年までに築かれたものと思われる。

ストラウスにとって社会心理学は、彼が関心を抱いた人間関係の生成・維持・修正といった社会的相互作用について、その理解を深める道標であった。ミードやブルーマーの社会心理学を継承したストラウスは、人間を、自発的な個人的意味づけに基づいて行動しながらも、同時にその意味づけの源泉を他者との社会的相互作用に求め、また新たな社会的相互作用を通して、自らの意味づけの維持や修正をしてゆく存在ととらえた。要するに、個人と集団(社会)は、つねに相互規定的な関係にあると考えていた。

こうした視点から、ストラウスは『鏡と仮面』でアイデンティティについて論じている。それによれば、人間の個人的なアイデンティティは、集合的なアイデンティティと分かちがたく結びついていて、相互を規定する関係にある。それは、発達段階に応じて安定化してゆくようなものではなく、絶えず過程的な状況にあって再構成を強いられる。たとえば、自他共に認める「よい入院患者」というアイデンティティを保つには、自分が入院患者として「よい」と考える行為を、病院で医師、看護師、他の患者、家族や友人などとの関係で実践し(試し)、その結果、彼らにやはり「よい」と認められ続けなければならない。

また、「よい入院患者」の定義は、自分が入院している病院の規則、医療者が医療文化で公認している価値観、あるいは一般社会で「善し」とされている価値観など、社会構造(社会組織)にも規定されている。ストラウスによれば、「社会構造と相互作用は密接に結びついており、また、時を超えて(繰り返し)相補的にお互いに影響を与えている」(ストラウス, 2001: 9)。そして、社会学は社会構造の解明に優れ、社会心理学は社会的相互作用の考察に優れているのだから、社会学と社会心理学は統合されねばならないとストラウスは考えた(ストラウス, 2001: 5)。

4. 医療社会学的な知見

以上のような社会構造と社会的相互作用の相即的な関係に関心をもちながら、サンフランシスコに移った1960年以降、ストラウスは医療現場をフィールドにした研究に携ってゆく。ハワード・ベッカーらと協働して書いた『白衣の青年たち (*Boys in White*)』(1961年)を皮切りに、『精神分析学的イデオロギーと施設 (*Psychiatric Ideology and Institution*)』(1964年)、『死のアウェアネス理論と看護』(1965年)、『死にゆくとき (*Time for Dying*)』(1968年)、『医療が失敗するとき (*When Medicine Fails*)』(1970年)、『ヘルスケアの人間化 (*Humanizing Health Care*)』(1973年)、『慢性疾患を生きる』(1975年)など、続々と医療社会学的な著作が刊行されていった。

私たちがこのコラムで注目している「死の Awareness」(＝死にゆくことに関する認識)や「死への軌跡」または「病みの軌跡」という概念は、それぞれ『死の Awareness 理論と看護』、『死にゆくとき』、『慢性疾患を生きる』から生み出され、医療社会学的に有用な知見として今日でも活用されている。これらの概念でも、やはりストラウスの社会心理学的関心である、社会構造と相互作用の相互規定的なあり方が示されている。ここでは、「病みの軌跡」を例にみてみよう。

病みの軌跡とは、単なる病気の身体的経過ではなく、そうした経過全般を通して発生するさまざまな「労働(work: 身体的ケアに限らず回復後の心配といった感情労働を含む)」の総合編成と、そうした労働や編成にかかわる人びとへの影響の総体を指している。この軌跡には時間的スパンがあり、その長さや早さ、またはその予測可能性の可否について、患者・医療者・家族の間で、あるいは同じ立場の者同士の間でも認識が食い違ったりする。また、たとえば病院か家かなど、その労働が展開する場所が異なれば、それにまつわる労働の状況は複雑化して、相互作用者のストレスは増大しかねない。

このように、病みの軌跡という概念は、それにかかわる相互作用者たちの行為と認識の個人的・集団的あり方(構造)や、その変化・維持の過程——すなわち複雑な「構造的過程」——について、当事者を含む読者全般に説明と予測を可能にさせる。しかし、そのような構造的過程は、基本的に規則やシステムで一元的にコントロールできるはずのものであるから、「管理(management)」という概念で説明は事足りる、という考え方もある。だが、ストラウスによれば、「慢性疾患の患者が医学的であるなしを問わず、数多くの段階と突発的变化という複雑な問題をかかえながら生きていることを考慮すれば、疾患(そしてその軌跡)の管理というとらえ方では不十分である」という(ストラウス他, 1987: 84)。

5. 方法論的貢献

ストラウスの考えでは、「管理」といった出来合いの概念を演繹的に適用しようとするアプローチではなく、まずは特定のフィールドワークに基づき、その具体的な現象を説明する概念をデータに根ざしながら帰納的に生成し、各現象の多様性を構造的に理解することが必須となる。そしてこれを可能にするのが、GTA による領域密着理論の生成ということになる。

現場での一次データの収集を可能にする社会学的なフィールドワークは、既にみたように、シカゴ社会学の伝統のうちにある。しかし、シカゴ学派のフィールド調査では、最終的な知見となる理論の生成の仕方が明示されていなかったため、それは長らく師から弟子への経験的な伝達に依存してきた。GTA では、量的研究における厳密な分析手続きをグレイザーが応用的に導入したことで、この点が改善された。つまり GTA は、ストラウスによるシカゴ学派の質的調査の伝統と、グレイザーが持ち込んだコロンビア大学の(ポール・ラザーズフェルト⁴に代表される)量的調査の伝統との邂逅により成立したものである。

生成したいくつかの領域密着理論の間で、類似した構造・過程を示す理論同士を比較分析した結果、そこにもっと広汎な構造・過程を説明できる理論が構築できれば、それは現実的でありながら十分な応用性をもつほど抽象度の高い理論(フォーマル理論)が生まれると、ストラウスは考えた。彼によれば、グラウンデッド・セオリーは、当時隆盛を誇っていたパーソンズの機能主義理論とその検証方法とされた実証主義的な量的研究が、「全体として最近の出来事(すなわち、非歴史的に)方向づけられてい

る」(ストラウス, 2001: 3)なか、本来もっと重視されるべき社会的相互作用と社会構造との過程的(時間的)な相互規定を、体系的に描出できる。こうした理論の生成によって、ストラウスは社会学的研究の変革を志向していたといえるだろう。

6. 展望

今回は、『死のアウェアネス理論』に戻って、第1章「終末認識の問題」と第2章「死の予期の多様性: 社会的定義の問題」(第1部 序論)を読んでゆきたい。第1章の内容は、第1回で論じた内容との重複が多いが、復習だと思って読んでいただきたい。また、第2章は、死のアウェアネス理論の基盤となる議論になる。次回も引き続きおつきあいいただければ幸いである。

¹ シカゴ社会学とは、1893年に創設されたシカゴ大学社会学部の研究者を中心に発展した社会学をいう。1920年代から30年代には、アメリカの社会学で中心的な位置を占めた。その特徴として、関心はプラグマティックなものが多く、シカゴという都市の日常で起こる多様な社会現象の解明が積極的に行なわれた。方法論は、直接的な観察を重視するフィールド調査が重んじられた。(町村, 1994: 352)

世代分けは4つにされることが多い。第1世代には、A・スモール、G・ヴィンセント、W・I・トマス、C・ヘンダーソンが数えられ、「ビッグ・フォー」と呼ばれている。第2世代は、R・E・パーク、E・バージェス、E・フェアリス、W・F・オグバーンらが構成し、シカゴ社会学の黄金時代を築いたといわれる。第3世代には、H・G・ブルーマー、L・ワース、E・C・ヒューズ、S・A・ストウファーがおり、第2世代の教え子でシカゴ大学において教育研究に従事した者たちである。第4世代は、H・ベッカー、A・L・ストラウス、E・ゴフマンらで構成され、第3世代の教え子ではあるが、シカゴ大学以外の場所で活躍した者たちである。(中野, 2003: 10)

² 1930年代までのいわゆるシカゴ学派の黄金期の研究と区別し、それ以降のとくに第2次世界大戦後以降のシカゴ社会学者の動向のことを、「第2次シカゴ学派」(または「新シカゴ学派」や「ネオ・シカゴ学派」と呼ぶ。ブルーマーのシンボリック相互作用論、ベッカーのレイベリング理論、ゴフマンのドラマトルギー論、ストラウスらのグラウンデッド・セオリーなどが、この動向を牽引してきた。(中野, 2003: 12-14)

³ ストラウスの経歴については、<http://www.ucsf.edu/anselmstrauss/cv.html> に詳しい履歴書がある。

⁴ ラザースフェルト(1901~1976)は、コロンビア大学を拠点に活躍した社会心理学者・社会学者で、数量的な社会調査の理論と実施に多くの業績を残した。なかでも、パネル調査法、潜在構造分析などの調査法を開発したことで知られている。(後藤, 1994: 901)

<引用文献>

グレイザー, B・ストラウス, A (1988)『死のアウェアネス理論と看護——死の認識と終末期ケア』木下康仁訳, 東京: 医学書院。

グレイザー, B・ストラウス, A (1996)『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 東京: 新曜社。

後藤将之 (1994)「ラザースフェルト」見田宗介・栗原彬・田中義久編『縮刷版 社会学事典』東京: 弘文堂, 901頁。

ストラウス, A 他 (1987)『慢性疾患を生きる』南裕子監訳, 東京: 医学書院。

ストラウス, A (2001)『鏡と仮面』片桐雅隆訳, 京都: 世界思想社.

中野正大 (2003)「シカゴ学派社会学の伝統」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』京都: 世界思想社, 4-42 頁.

町村敬志 (1994)「シカゴ学派」見田宗介・栗原彬・田中義久編『縮刷版 社会学事典』東京: 弘文堂, 352 頁.

◇第 45 回研究会のご案内

日時: 5月 31 日(土) 13:00~18:00

場所: 立教大学(池袋)10 号館x209教室

発表: (今回はすべて研究発表です)

1. 発表者: 小池磨美(高齢障害者雇用支援機構障害者職業総合センター)

小松まどか(")

テーマ: 精神障害者の就労支援プロセスについて

概要: 「精神障害者に対する就労支援過程における当事者のニーズと行動の変化に応じた支援技術の開発に関する研究」というテーマで、昨年から今年にかけて、精神障害者の就労支援経験者17名を対象にインタビューを行い、その逐語から、3名の分析者がそれぞれに分析を行ってきた。今回、3名のうち2名の分析について発表する。

2. 発表者: 坂本智代枝(大正大学)

テーマ: 「精神障害者のピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの実践プロセス」

概要: ピアサポート活動には、スーパービジョンやコーディネーター等サポーターを支援するソーシャルワーカーの実践が背景にあるが、そこではどのような実践が行われているのかは明らかにはなっていない。そこには、ソーシャルワーカーと当事者であるピアサポーター等の社会的相互作用が存在している。その「うごき」の現象を明らかにすることは、今後のピアサポートの実践やピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの実践に役に立つと考えている。

3. 発表者: 河先俊子(フェリス女学院大学)

テーマ: 韓国人留学生と日本人との関係構築プロセス

概要: 韓国人留学生が日本人と人間関係を築くプロセスを、歴史認識など日韓関係の問題が及ぼす影響に注目しながら分析する。

* 研究会のはじめに 2008 年度の総会を行います。

◇編集後記

- ・今年の連休は、比較的よいお天気にめぐまれました。忙しい3月4月を過ごされた皆様も、ほっと一息つかれたのではないのでしょうか。さて、ちょっと遅くなりましたがニュースレターNo.28をお送りします。
- ・研究会の会員である松戸宏予さんが日本学校図書館振興会と全国学校図書館協議会より「学校図書館賞」を受賞されました。タイトルは、「学校図書館における特別な支援の在り方に関する研究—学校司書と教職員を対象としたフィールド調査を中心に—」で、7章構成の論文のなかで、論文の核として、5章にM-GTAを用いられたそうです。松戸さん、本当におめでとうございます！
- ・「近況報告私の研究」では、これまでに多くの方に寄稿していただきました。研究会で発表された方は、「あの研究はどうなったかな」と気になりますし、発表されていない方も、現在の研究テーマや関心などを報告していただくと、「面白い研究だな」、「今度、研究会で発表してほしいな」と思ったりします。また、それぞれの方が、M-GTAをどのように咀嚼して研究に活用されているかを知ること、とても参考になります。まだ書いていただいていない方も、すぐに順番が回ってくると思いますので、どうぞよろしくお願いします。
- ・今月の研究会は、はじめに今年度の総会を行います。是非、ご出席ください。また研究会の後、いつも懇親会を行っています。こうした場で、結構、研究のアドバイスやヒントが得られたりするものです。こちらも是非、ご都合がつけば顔を出してみてください。

(佐川)